# かかわり合いながら、主体的に学びを深める　上島田っ子の育成

～　対話的活動の工夫　～

光市立上島田小学校

## １　主題について

本校では、一昨年度から引き続き「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に取り組んできている。児童自らが自分の考えをもち、これまで、他者と積極的に話し合うことができる活動を仕組んだ授業についての実践を重ねてきた。昨年度は副主題を「対話的活動の工夫」とし、対話的な活動をとおして、学びを深めるための授業作りを中心に、様々な教科において研修をしてきた。その中で、「話し方・聞き方」「話し合い方」について教職員で共通理解したり、ノート検定やめあてや振り返りについての検討や話し合いの形態についての研修を重ねたりしてきた。

昨年度からの「新しい生活様式」の下での授業に、当初は戸惑いもあったが、子どもたちを「深い学び」につなげるための教師の「問い返し」や「切り返し」の大切さが「対話的活動の工夫」の課題として見えてきた１年にもなった。また、急速に進んだＧＩＧＡスクール構想で「１人１台端末」が実現した今、「オンラインだからこそできる授業」「ＩＣＴだからこそできる学習効果」も同時に追求することで、研修課題解決に向けて新たな視点を加えて取り組んでいくこととした。

## ２　主題解明の方法

○　各教科の授業研究をとおした対話的な活動の工夫

- 単元全体を見通した効果的な対話的活動の導入
- 児童が主体的に活動できる課題設定
- ＩＣＴ活用による対話的活動の工夫
- ＩＣＴ活用による児童の実態把握及び学力向上の取組
- 学習中の児童の理解度の把握とその生かし方の工夫
- 相手を意識した伝え合い、個の意見を全体に生かす指導の工夫
- 対話的活動に深みをもたせるための教師、児童による切り返しの工夫
- 効果的な学習のまとめ方、振り返り方の工夫
- 対話的な活動の評価の仕方
- 対話的な活動と学力のつながりの解明
- 学習規律や学習習慣等の系統的な指導
- 研究協議をもとにした指導案の作成と授業の実施
- 教師同士の授業評価、児童による授業評価、地域の方による評価の積極的な取組

## ３　研究組織

| 研究組織 | 研修企画委員会<br>校長・教頭・教務・<br>研修・学力向上 | ―― | 全　体　研　修 | ―― | 低学年・中学年<br>高学年・特別支援<br>養護教諭 |
|---|---|---|---|---|---|

## ４　研究授業・研修について

４月１４日（水）校内研修について（評価等）研修主題・評価について
５月１２日（水）本年度の校内研修全体計画について　計画・板書・ノートについて
６月　１日（火）今後の研修について　授業評価について
７月　８日（木）学年授業　（　おおぞら１組　「しゃきっとタイム」自立活動　）
７月１４日（水）全校授業　（　３年　国語科　「組み立てを考えて、ほうこくする文章を書こう」）
講師：中谷靖彦教頭（学力向上リーダー）
８月　２日（月）人権教育研修　「多文化共生の推進について」１３：３０～１５：３０
講師：山口県国際交流協会　田中沙織様　　日本語指導講師　山本貴子様
８月１７日（火）ＩＣＴ研修　　講師：奥屋隆伸校長
８月２１日（土）教育課程複伝
８月３０日（月）児童理解研修　講師：新山律子特別支援地域コーディネーター
９月　８日（水）指導案検討（　１年　生活科　）授業アンケートの分析について
１０月２５日（月）学年授業　（　２年　生活科　外国語活動　Water　）
１１月　２日（火）学年授業　（　４年　体育科　「打って！守って！みんなでベースボール」　）
１１月１６日（火）学年授業　（　６年　音楽科　「和音の音で旋律作り」　）
１１月１７日（水）全校授業　（　１年　生活科　「たのしいあき　いっぱい」　）
講師：井口康江教諭
１２月　３日（金）学年授業　（　６年　算数科　「表を使って考えよう」　）
１２月　８日（水）研究集録について
１２月１４日（火）全校授業　（　５年　外国語科　「Ｍｙ　hero」　）ユニット型研修
講師：光市教育委員会　加藤　剛指導主事
１月１２日（水）アクションプランの検討
１月３１日（月）学年授業　（　５年　算数科　「速さ」　）
２月　８日（火）研修の振り返りと来年度の課題について
２月１６日（水）総合的な学習のカリキュラムについて（見直し）
２月末　　研究集録完成
３月　９日（水）来年度に向けて　学力向上プランの見直し

## ５　研究内容

### 第１学年　生活科「たのしいあきいっぱい」

自分の作ったおもちゃを大切に扱い、パワーアップすることに意欲が感じられた。友達へのアドバイスは、伝える側も受け取る側も双方の納得に繋がることは難しいが、良さを伝えることは、受け取る側にはとてもうれしい様子であった。園児さんを招待するという次の大きな目標が意識できていた。

### 第２学年　生活科「外国語活動」：Water

外国語活動と他教科の学習を融合させた授業であった。学校の学びが児童の生きる力に結びつくように学びが繋がっており、まさに学びが「生きる力」となると感じた。Water の意味や発音を学ぶだけの時間ではなく、使用する水の量を視覚的に理解し感想を持つことができた。

## 第３学年　国語科
「組み立てを考えてほうこくする文章を書こう」

各自が書いた報告文を読み合って、互いにアドバイスをすることができていた。
ペアの組み方にも配慮が見られた。
アドバイスのポイントを全体に提示することで、より対話的活動が活性化されていた。

## 第４学年　体育科「打って！守って！みんなでベースボール」

本時までの学習において、各チームにルールの徹底がなされていた。チームの目標に向かっての作戦や練習計画も毎時間の振り返りから作り上げられており、実効性があるものとなっていた。自分たち技術の上達を授業の中で実感できていた。

## 第５学年　外国語科　「My　hero」

チャンツが定着しており、生き生きと活動する姿がみられた。即興的な会話ややりとりができる児童も数名おり、英語を使うことが楽しいといった雰囲気が伝わってきた。相手を意識した表現（表情も含む）を高める授業だった。

## 第５学年　算数　「速さ」

ＩＣＴをタイミング良く使って、意見を比較することができていた。自分の考えを伝える際に言葉に詰まってしまう児童には、「だから？」「次に」などのつなぎ言葉で助け船を出し、最後まで自分の言葉で説明することを大切にした授業だった。

## ６年　音楽科　「和音の音で旋律作り」

旋律作りが、自分だけの創作に終わらず、グループで音を聞き合ったり、ＩＣＴを使って全体で旋律を確かめ合ったりすることができていた。作った旋律を友達から賞賛された時の満足感が、児童の表情から感じられた。

## ６年　算数科　「表を使って考えよう」

情報を「表」に整理すると、見えなかった数値が見えてきて解決の糸口となることに気づく時間となった。ＩＣＴの普段使いが定着していることから、意見の交流にも、まとめにもタブレットを使い、学びを深めていくことができていた。

## 校内研修８月：多文化共生の推進に向けて

本校にインドネシアの児童が４人在籍していることから、日本語指導の体制作りと心構えを学ぶための研修を実施した。結論として「外国人が学びやすい学校は日本人にとっても学びやすい学校」ということだった。

## おおぞら１組　自立活動　「シャキッとタイム」

一人ひとりのペースに合わせる自由な時間では決してなく、個人の目標→成長につなげる貴重な時間を共有できていた。予測不能な反応にも瞬時に対応ができる教師の力量が光っていた。
チームとして指導する為には、日頃からの打ち合わせが大切な事も学んだ。

## ６　成果と課題

今年度のスタートは、一斉休校はなかったものの「新しい生活様式」の下で、どのように教育活動を進めていくかを全教職員で確認し合った。

本校では「対話的活動」については、ここ数年の研修課題に掲げており、その結果、話し合う形態が児童に身についてきており、①自分の考えをもつ　→②近くの友達と意見交換する　→③グループで意見をまとめるといった自然な流れができつつあった。その状態からのコロナ禍への突入となったことで、一時「対話的活動そのものをしてよいのか」という気持ちになることもあった。

しかし予測不可能な未来に向けて準備が進んでいた、ＧＩＧＡスクール構想が加速化され、１人１台端末の整備が進むことで、ＩＣＴを活用し、一人ひとりのペースに応じた「個別最適な学び」と子ども同士が対話などを通じて学び合う「協同的な学び」を一体的に充実させる方向に、自然に進んでいくこととなった。

当初、学校ではＩＣＴの活用に際しては、何から始めたら良いのか正直混乱していた。それでも「子どもたちのために」と前向きに捉えて、授業でＩＣＴをどのように活用するのか、研修の機会を設けては進めていくこととなった。

子どもたちのスキルアップは想像以上ですぐに使い方にも慣れていった。「とにかく使ってみよう」からスタートした本校でのＩＣＴの活用が「授業のどの場面で、どのように活用することが効果的か」というレベルにまで引き上げることができたのは、ＩＣＴの導入が、ただ単に「個別学習」のためだけでなく「協働的な学び」へのメリットがあるとの実感が授業での活用を通して持てたからではないかと思う。また、市内での実践例や県内での実践例等が手元に届くことで、授業場面での活用の具体的なイメージを持つこともできた。

さらに今年度は、クラスの中だけでつながるだけでなく、他の小学校とも交流した学年もあり、本校のような小規模校にとっては多様な意見に出会う機会、発信する目的を持つ機会ともなっていた。

幅広く進んだ１年だったことで、児童一人ひとりに目を向け「学びが深まった姿」となっているかを意識しながら授業を進めていたかどうか、評価の方法やタイミングのあり方には課題が残った。また、「学びを深める教師の発問」について、学校全体では追求できていなかったと感じている。

来年度は、ＩＣＴの利活用とともに、学びを深める「切り返し」「問い直し」の教師の発問を追求するとともに、児童同士のやりとりの中で「切り返し」「問い直し」の言葉が生まれ、話し合いが児童自身の力で活性化するような、主体的な学びをさらにめざしていきたい。